関の内部・外部の環境の変化はもちろんですが、やはり採録の中止が大きかったと思います。

採録がなくなったことは、私にとっても大きなことでした。採録作業は自分自身に大変役立つことでもあり、また少なからず社会に貢献しているという誇りもありました。これがなくなったことで、経資協に参加し続けることに若干の疑問が生じたことも事実です。かと言って、採録を続けることは不可能。一方、採録負担をなくしても会員減少、特に機関会員の減少には歯止めはかかりませんでした。財政的な問題、人員配置の問題もあったかと思います。私もセンターの予算会議のたびにビクビクしていたものです。

研究会を中心とした組織への移行など存続を模索し続けましたが、解散という苦渋の決断をせざるを得ませんでした。

気の重い後半でしたが、最後まで会員で有り続けられたのは、気の重さを払拭する魅力がまだまだあったからです。研究会・見学会や総会で訪れることのできた場所、何より人的交流（ノミニケーションとも言う）。経資協でお世話になった方々へお礼を申し上げるとともに、これからも何かの形でお付き合いを続けさせていただけたらと願っております。

協議会の思い出

是枝　洋
（元法政大学大原社会問題研究所）

私が杉本先生のお世話で大原社研に入ったのは1965年9月、もう43年も昔のこととなりました。これが協議会とのご縁のはじまりでした。初めての季報の採録は労働関係の雑誌では採録基準に苦しみました。今までどういうのをとっていたのか調べたりして、迷いながら

の採録でした。労働雑誌には著者名の名前に読みのないのが多くてこれにも困りました。編集部に著者名には読みをいれてほしいとお願いしましたが、なかなか実行してもらえませんでした。

そのころの研究所は戦後がまだ終わってない状態で、新宿柏木にあった土蔵から本をもってきて目録をとってまた戻すといった非能率的なことをしていました。協議会の仕事も押せ押せになって締め切り間際に出していました。1969年、研究所の50周年記念の展示会が終わった頃から大学は紛争に巻き込まれ、私たちは研究所にもはいれなくなってしまいました。工学部のあった麻布の建物を借りていたのでそこにうつり、研究所を占拠していた学生が留守のときに本を運んですこしずつ引っ越ししました。そのころに『経済学二次文献総目録』の採録も舞い込んできましたが、こんな騒ぎのなかであまり綿密な作業ができませんでした。

1981年にやっとその戦後も終わり、すべての資料が新築された図書館の5階に集められたときは感無量でしたが、直後に病気になり半年ほど休みました。そのころロシア語の雑誌の分担をしていましたが、ほかの方に頼めないので、自宅で寝ながら採録した思い出もあります。

病癒えてでてきた私に事務局長の話がふりかかってきました。名事務局長の鍋島さんのあとではやれそうもないなと思ったのと研究所は多摩への移転を控えていて忙しいときだったので躊躇したのですが、所長の二村さんも認めてくれ、田沼明子さんや小島英恵さんに助けてもらって事務的にはなんとかやりました。しかし、協議会には季報の編集センター問題が大きくのしかかっていて、その対策のため、会議、会議の連続でした。センター問題を解決するためのひとつと考えられていたのが、機械化でしたが、これもあまり助けにならず、センターを辞退するところが続出し、いろいろな対策案が出ましたが、議すれども決せずという状態になって結局1987年11月の理事会で休刊を決めました。翌年法政大学で開かれた総会で事務局長を辞めた私は解放感とともに、忸怩たる思いをいだくことになったのでした。